

『源氏物語』 竹河卷別筆説の可能性

—— 竹河卷における固有語からの考察 ——

吉村 研一

論文要旨

『源氏物語』五四帖は誰の手によって書かれたものであろうか。匂宮三帖、とりわけ竹河卷は古来より他の巻とは別筆ではないかと疑われてきた。最近ではこの論争は沈静化されているが、本稿では敢えてこの問題に取り組んでみた。

研究史の中には物語内の語彙の用法に着目して、その用法の違いを分析することにより、別筆説を導き出そうとする作業もあるが、本稿は語彙そのものに焦点を当てた。『源氏物語』は、その場の自然の状況や登場人物の心の動きなどを表現するために、実に多彩な複合語を駆使していて、それらの複合語は源氏以前には用例のない源氏固有の造語が多い。これらの固有語を調べ出して、その造語方法の特徴や巻ごとの分布などを把握して、竹河卷の語彙と比較した。果たして別筆の可能性はありやなしや。

キーワード 【源氏初出語】 巻固有語 複合語の特徴 別筆 竹河卷】

(はじめに)

折りて見ばいとどにほひもまさるやとすこし色めけ梅の初花

* (竹河 六九頁)

* 引用はすべて小学館『新編日本古典文学全集』より

薫が玉鬘郎で上臈の女房に詠みかけられた歌である。「まめ」ぶりが評判の薫に対して「もつと色めいてみなさいよ」とからかわれるのである。さらに玉鬘に「うたての御達や。恥づかしげなるまめ人をさへ、よくこそ面なけれ」と言われた薫の心内は「まめ人、とこそつけられたりけれ、いと屈じたる名かな」と悔しがる。この竹河卷における薫は「まめ人」と呼ばれることを嫌っているのである。情けなく思っているのである。この部分は薫の人物像を理解する上で、不可解な印象を読者に与えてはいまいか。なぜなら、橋姫巻以

降の薫は周囲に対してむしろ己の「まめ人」ぶりを喧伝しているからである。それがよく分かる顕著な例を、浮舟巻の匂宮とのやりとりの中に見出すことができる。

夕つ方、右大将(薫)参りたまへり。(匂宮)「こなたにを」とて、うちとけながら対面したまへり。(中略)聖だつといひながら、こよなかりける山伏心かな、さばかりあはれなる人(浮舟)をさておきて、心のどかに月日待ちわびさすらむよ、と思す。例は、さしもあらぬことのついでにだに、我はまめ人ともてなし名のりたまふをねたがりたまひて、よろづにのたまひ破るを、かかること見あらはいたるをいかにのたまはし、されど、さやうの戯れ言もかけたまはず、(浮舟 一四〇)

宇治に浮舟を囲つてもて遊んでいるのを知った後の匂宮の心の内である。薫の何が「まめ人」なものか、ことあるごとに「自分はまめ人だから」と振る舞い、それを口にするのをいまましく思っている。匂宮の心境が良く描かれている。

実際に薫が「まめ人」であるかどうかは問題ではないし、語り手から「まめ人」と呼ばれて、薫の世間体が「まめ人」と見られているかどうかなどということはどうでもよい。問題は、薫本人が「まめ人」と思われたか思われたくないかが、人物像の本質に関わる問題なのである。それが、竹河巻の薫と橋姫巻以降の薫とは一八

〇度異なつて描かれているのである。私はここに竹河巻における最大の違和感が存在すると考えている。

一、先行研究

竹河巻の作者は紫式部でありやなしや、といった問題については最近ほとんど論じられていない。確かにテクスト論が中心の現在の文学研究においては、作者うんぬんは大して重要ではないのかもしれない。しかし古注以来様々な角度から疑問が投げかけられ、武田宗俊が戦後一九四九年に「竹河の巻は紫式部ではあり得ない」と論陣を張つて以降、にわか注目されるに至っている。武田の根拠は以下の三点、①文章、和歌ともに拙劣である。②男踏歌の記事の部分が初音巻の無自覚な機械的模倣である。③官位の矛盾(夕霧が左大臣となつているが宇治十帖では右大臣、など)である。続いて池田亀鑑が一九五一年に『新講源氏物語』^②において「匂宮、竹河の両巻は宇治十帖の完成後、第二部とのつなぎ、第三部の発端という目的で、紫式部以外の人物が書き加えた」と論究して、その主な根拠を文体、修飾語の用法の違い、引き歌技法の拙劣なことなどとしている。一九五〇年代の末から六〇年代の初めには、小山敦子が匂宮巻の一部分と紅梅・竹河巻の別人作を取り、石川徹も匂宮・竹川両巻の疑わしさに注目している^④。その後、石田穰二が一九六〇年代の前半にこの問題に精力的に取り組み^{⑤⑥⑩}、匂宮巻、紅梅巻、竹河

「巻の三巻における語彙考証に着目し、「この三巻とも語彙の用法が他の巻に比べて異質である」と分析して、別人説に至っている。以降、高橋和夫⁽¹¹⁾、稲賀敬二⁽¹²⁾、野口元大⁽¹³⁾なども、少なくとも竹河巻は紫式部の作であることが疑わしいという立場を取っている。

一方一九七〇年代に入って、竹河巻の紫式部作者説が浮上してくる。その先陣となったのが今井源衛⁽¹⁴⁾である。今井は竹河巻における和歌に着目し、紫式部集における和歌との類似点を見出して、「同じ作者と考えるのが妥当」と結論し、さらに官位の矛盾については「竹河巻で左大臣に昇進した夕霧を宇治十帖では右大臣に戻したのは、藤原道長を憚つての配慮」と分析している。つまり当時の絶対的権力者である左大臣・道長を意識すれば、物語中の人物とはいえず、「左大臣」を造型するという危険を冒す気はしなかつただろう、という考え方である。大朝雄⁽¹⁶⁾も作者紫式部説を取るが、この三巻の文章が拙劣であり、物語内容が自閉的であると同時に話題としての成熟度に著しく欠けることから、「作者は紫式部であるが、推敲する以前の未定稿とかんがえるべき」と折衷的な方向に結論を見出している。「また、池田和臣⁽¹⁷⁾は官位の矛盾などといった齟齬の部分に捕らわれるのではなく、匂宮、紅梅、竹河巻三巻が物語全体に及ぼす構造的意義という角度から分析すれば、三巻ともそれぞれ重要な役割を果たしている、紫式部作の可能性が十分考えられると考察している。

一九九〇年代以降はこの問題に関する研究は沈静化された。わず

かに田坂憲二⁽¹⁹⁾が、今井の竹河巻同一作者説の根拠に対して、「竹河巻と紫式部集の歌の関係は絶対的ではないこと。また、夕霧を右大臣に戻したのは左大臣藤原道長に憚つてのこと、というのは資料誤認などがあり従いがたいこと」といった反論が散見される程度である。確かに作者の問題にこれ以上関わってみても、何か新しい資料でも発見されなければ、前に進む可能性は低いし、池田が言うように、文学研究上、誰が創作したかということは大して問題ではなく、この三巻が物語の構造上どのように関わっているかこそが重要な点であろう。しかしながら、であるならばこそ、つまり竹河巻が物語の構造上何らかの役割を果たしているのであれば、やはり誰によって書かれたかは無視できない問題となる。紫式部以外の作者によって書かれたとすれば、物語の構造において意味を持つ巻になることは考えられない。別筆であるならば竹河巻というピースを『源氏物語』というジグゾーパズルから除外して扱わなければならない。この1片のピースが他の53片のピースと齟齬をきたし、物語を歪めてしまうことになるからである。

二、『源氏物語』における語彙の特徴

よって本稿では、竹河巻は誰の手によって書かれたかについて、あえて考察を進めていきたい。方法としては竹河巻に使用されている語彙に注目して、他の巻との比較分析を試みるものである。石田

穰二は「この三卷（匂宮卷、紅梅卷、竹河卷）とも語彙の用法が他の巻に比べて異質である」と分析して、別人説に至っているが、本稿では、語彙の用法ではなく、語彙そのものを取り上げて、他の巻と異質であるのか、もしくは同質であるのか、考察していくものである。

さて、『源氏物語』がいかに多くの語を駆使したかについては、その品詞別の異なり語数によってよく理解できる。以下に『源氏物語』とそれ以前の代表的な五つのかな文学作品との名詞、動詞、形容詞、形容動詞の異なり語数を表にまとめてみた。（語数は『うつほ物語』は独自調査で有効数字は二桁、それ以外は大野晋の研究²⁰に従った）

表 1

	万葉集	土佐日記	竹取物語	枕草子	うつほ物語	源氏物語
名詞	四六六〇	五二九	七二七	三〇四八	七八〇〇	六五〇一
動詞	一五四五	三二六	五五二	一六二〇	四一〇〇	五五五四
形容詞	二七六	六六	一〇五	三四九	五四〇	一一三〇
形容動詞	七五	一一	四五	二二五	三二〇	六八三
合計	六五五六	九三三	一四一九	五三三二	二七五〇	一三八六八
名詞比率	(七一%)	(五七%)	(五一%)	(五八%)	(六一%)	(四七%)

『源氏物語』は長編であり、ここに挙げた他の作品と比べて、のべ語数の多さも際だっていて、異なり語数の単純な比較はできない。名詞について言えば、作品のボリュームの増大に伴って異なり

語数は比例的に増大するであろう。登場する人物、場所、対象物などは、場面場面が変わる度、時間が進む度に新しい固有名詞が出現することになるし、それらに付随して一般名詞も増大するであろう。しかしながら動詞、形容詞、形容動詞はそのような名詞とは異なっている。登場人物が変わるうと、場面が変化しようと、どんなに長編であろうと、同じ言葉が繰り返されることでも十分に成立してしまうのではないだろうか。たとえば『うつほ物語』は『源氏物語』と比較して文章のボリュームは三分の二程度といつかかなりの長編であり、名詞の異なり語数は七八〇〇語を数え、源氏の六五〇〇語よりむしろ多いほどである。しかしながら動詞の異なり語数は源氏と比較してその七割にしかすぎない。漢語にサ変動詞「す」を付けて多くの動詞を生み出したにもかかわらずである。さらに形容詞、形容動詞にいたってはそれぞれ五割にも満たない。表で比較したその他の作品においても名詞の数に比べて動詞、形容詞、形容動詞の数が少ないことは、名詞比率を源氏と比べてみることで明白に分かる。この傾向ひとつを取ってみても、『源氏物語』が自然の様子や人の容態、動作、心の動きをどのように表現するべきかにこだわりを持ち、語彙の使用に工夫を凝らしていたかが分かる。そのこだわりゆえに『源氏物語』は全編を通じて一回しか使用されていない語（動詞、形容詞、形容動詞）が多数存在し、それらの多くが複数の単語を組み合わせた複合語である。ここで言う複合語は接頭語などの接辞と組み合わせられた派生語も含む。そしてこれらの複合

語の大半は源氏以前の主要な文学作品には見出すことができない語である。本稿では源氏以前の主要な文学作品を『古事記』、『万葉集』、『古今和歌集』、『後撰和歌集』、『拾遺和歌集』、『竹取物語』、『伊勢物語』、『土佐日記』、『大和物語』、『平中物語』、『蜻蛉日記』、『うつほ物語』、『落窪物語』、『三宝絵詞』、『枕草子』として、これらの作品に見出せない名詞以外の自立語を源氏初出語と名付けた。源氏初出語は全編で約三千語にも及び、その八割が複合語であり、その多くが源氏作者の創作によるものと考えられる。

ここで『源氏物語』における初出複合語の主な特徴を考察する。

①「思ふ」、「聞く」、「言ふ」

語頭に最も多く使用される動詞のベスト三を挙げると以下のようになる。

- A 「おもふ(思)」系 (尊敬語「おぼす」「おもほす」含) (約二四〇語)
 B 「きく(聞)」系 (「きこゆ」、尊敬語「きこしめす」含) (約一〇〇語)
 C 「いふ(言)」系 (尊敬語「のたまふ」「のたまはす」、謙讓語「まうす」含む) (約九〇語)

「おもふ(思)」系が突出して多く、いかに物語が「人の思い」、「人が心の中で思うこと」にこだわりを持っていたかを示している。「おぼし・ゆるす(思許)」の一九例、「おもひ・あつかふ(思扱)」の

一七例など、初出語ではあるが、繰り返し物語内で用いられ定着した言葉も多い。「おもひ・なやむ(思惱)」などは現代でも遍く使用されている。また「おもひ・あかし・くらす(思明暮)」、「いひ・かかづらひ・いづ(言拘出)」などのように、三語以上の自立語を組み合わせた複合語は源氏作者の得意技とも言え、源氏以前の主要な文学作品にはほとんど例を見ない。

②「うち」、「もの」、「なま」

接頭語を付加することによって生み出された初出語が多く、そのベスト三の接頭語を以下に挙げる。

- A 「うち+〇〇」(約二二〇語)
 接頭語として極めて多く用いられ、用例の多い順に「うちみだる(打乱)」一六例、「うちひそむ(打攀)」一一例、「うちかしこまる(打畏)」八例、「うちしめる(打湿)」八例、「うちしきる(打頻)」七例などが挙げられる。接頭語「うち」は本来「強く」、「少し」、「すっかり」、「すばやく」など主に動詞に付いて種々の意味を加えるが、一二〇余語の半数以上の七〇余語が一例のみの用例であり、「うち」が付く場合と付かない場合でどのような意味の差異があるのか分からない語も多い。

B 「もの+〇〇」(約四〇語)
 「ものきよげなり(物清)」の一七例が用例数としては突出して多く、それに続くのが「ものすさまじ(物凄)」と「ものとはし(物遠)」

の五例である。「もの」は主に形容詞、形容動詞に付いて「なんとなく」という意味を加えているのであろうが、半数以上の二〇余例が「ものあざやかなり(物鮮)」、「ものうひうひし」のように一例のみの用例であり、「うち」と同様に「もの」が付く場合と付かない場合の意味の違いがはっきりしない語も多い。ただし、「ものさびし(物寂)」も源氏初出語であるが、これなどは現代に生き残った名作とも言える言葉ではないか。

C 「なま+〇〇」(約四〇語)

「なま」が接頭語として付いた言葉は種類は多いが用例数の多いものはない。四例が最高で「なまねたし(生妬)」、「なまはしたなし(生)」、「なまわづらはし(生煩)」が挙げられる。やはり大半の三〇語ほどが一例のみの用例である。「なま」が名詞に付加される場合は、「未熟な」とか「若い」といった意味で明白に理解できるが、動詞、形容詞などに付く場合は複雑で様々な意味合いをもたらず言葉となる。

③接尾語の付加

接尾語を付加することによって品詞を変換した初出語が多数見られる。

A 形容動詞への変更

「か」、「らか」、「やか」、「げ」、「がち」などの接尾語を名詞、形容詞、副詞などに付けて、形容動詞として表現された初出語が多い。

「あえかなり」一七例、「なよびかなり(柔)」一〇例、「かろらかなり(軽)」一五例、「わららかなり(笑)」五例、「なごやかなり(和)」七例、「あをやかなり(青)」五例、「うらめしげなり(恨)」一七例、「あやふげなり(危)」六例、「ながめがちなり(眺)」六例、などが挙げられる。これらの語は「あえかなり」以外は()内に漢字で記したように、基になる意味は明白であり、初出語といえども概ね分かり易い言葉であったと言えるよう。

B 動詞への変更

「む」、「ぶ」、「だつ」、「やく」、「めく」、「がる」などの接尾語を名詞、形容詞、形容動詞などに付けて、「」のようになる。「」のようにする」といった意味の初出語動詞が多くつくられている。「あはむ(淡)」一一例、「かるむ(軽)」八例、「むつぶ(睦)」二四例、「わかぶ(若)」一六例、「うるはしだつ(麗)」六例、「さかしだつ(賢)」五例、「たをやぐ(嫻)」八例、「さわやく(爽)」五例、「おやめく(親)」九例、「ひとめく(人)」七例、「おやがる(親)」一五例、などが挙げられる。また、「おびやかす(怯)」のように、動詞「怯ゆ」の未然形に「かす」を付けて、他動詞で使役的な動詞に変えたり、「あざればむ(戯)」のように動詞「戯る」の連用形に「ばむ」を付けて、「」の状態にする」という意味の動詞をつくる初出語の例なども多数見られる。

C 形容詞への変更

「がまし」「めかし」などの接尾語を名詞、副詞、動詞、形容動詞

などに付けて、「すぎがまし」(好)八例や「いろめかし」(色)七例のように、「くの様子である」という意味の初出語形容詞を造っている。また「かなひがたし」(叶)六例、「しづめがたし」(鎮)六例、のように、動詞に接尾語「がたし」を付加して困難なさまを表現する初出語も多い。

④ 疊語

「いまいまし」のように、同一の自立語が反覆された言葉で、その反覆により特殊な響きをもたらすという効果があり、強調の修辭法として好んで用いている。物語中に二六〇語を超える異なり語が使用され、うち初出語も一一〇語を数える。二六〇語のうち、名詞を除きでは二〇〇語ほどになり、うち初出語は七〇語余りである。さらにこの七〇語のうち半数以上の四〇例程が「あしあしも」(悪悪)や「ざえざえし」(才才)のように、物語中に僅か一例しか使用されておらず、これらの語は源氏作者によって造られた言葉か、あるいは女房を中心とした狭い範囲でのみ使用されていたいわゆる女房言葉の類であろうと考えられる。現代でも「ラブラブ」「アンアン」など、女性が造り出した反覆語の流行語は多い。初出語で使用例の多い疊語は、「くだくだし」一一例、「いまいまし」一〇例、「なさけなさけし」一〇例、「よそよそなり」一〇例などが揚げられる。また、初出語ではないが、物語内で大量に繰り返し使用されたことが原因で、現在の日常会話にも遍く用いられることになったと考え

られる疊語がある。「かるがるし」という言葉である。源氏以前には『うつほ物語』と『枕草子』に一例ずつしか見出すことができないう稀有ともいえる言葉が、本物語においてはその母音交換形「かるるし」も含めて七九例にも及ぶ用例を数え、源氏作者の疊語へのこだわりが窺える。

⑤ 「く顔なり」という表現

「く顔なり」という言葉の複合語の形容動詞(「く顔」という名詞もある)は源氏以前にも「しらすがほなり(不知)」、「したりがほなり」など、『大和物語』、『うつほ物語』、『蜻蛉日記』、『枕草子』などに些少の用例があり、『源氏物語』が編み出した表現ではないが、源氏作者が好んで使用した複合語であり、「しらすがほなり」三三例、「したりがほなり」一四例と多くの用例を数える。物語中に六〇語の異なり語があり、そのうちの五〇語ほどが源氏初出語であり、かつその大半が物語内で一例のみの出現である。初出語の中には「おどろきがほなり(驚)」四例、「うれへがほなり(憂)」二例のように、現代も使用されているような射的を組み合わせたものもあるが、「いとひきこえがほなり(厭聞)」一例、「うしろみがほなり(後見)」一例、「すみつきがほなり(住着)」一例、「すみはなれがほなり(住離)」一例のようなユニークな組み合わせも多い。

⑥ 漢語の導入

また、すでに『うつほ物語』に多く見られるように、漢語を和語に仕立て上げて物語内に取り込んだ例も多い。「きやうざく(驚策)・なり」七例、「けちえん(掲焉)・なり」七例、のように漢語をそのまま用いて形容動詞化した初出語や、「じねん(自然)・に」八例のように副詞化したり、「けしき(気色)・だつ」七例、「けさう(懸想)・ぶ」五例、「さうど(騒動)・く」六例のように接尾語を付加して動詞化した初出語も多い。山口仲美の整理によると、『源氏物語』の全語彙のうち一三パーセントが漢語で、『竹取物語』の八パーセント、『伊勢物語』と『土佐日記』の六パーセント、『蜻蛉日記』の九パーセントと比較して、漢語含有率の高さが示されている。

以上『源氏物語』における初出複合語のいくつかの特徴を述べてきたが、これらの複合語は一語にして明快に状況、動作、心情、情景を表現してしまうという利点がある。「なげき・あかし・くらす」「しのび・ありく」なども一語で人の心情や動作を巧みに表現した言葉であり、このような『源氏物語』独特の造語は、その多くが千年の時を経た現代の言葉としても生き残り、通用するに至っている。複合語の造語はまさに『源氏物語』の作者の傑出した才能であったと言える。

三、巻固有語の抽出

さて、この複合語の造語能力に着目して各巻と竹河の巻を比較、考察しようというのが本稿の趣旨である。『源氏物語』においてその巻にしか使用されていない語を本稿では「巻固有語」と名付けた。ただし、この巻固有語は巻内でも一回しか使用されていない語が多く、二回以上使用されている例は些少であった。以下に巻固有語の数を掲げた。() 内の数字はその固有語の出現頻度を数値化したものである。数値化の方法として、岩波の新大系本一頁当たり換算して、平均して何語の固有語が出現しているかを少数点1桁まで表したものである。数値が大きいほど出現頻度が多いことになる。

【巻固有語の出現数と出現頻度】

第一部(若紫系)

- 桐壺三七語 (1. 5語) 若紫七四語 (1. 6) 紅葉賀五一語 (1. 8)
- 8) 花宴一七語 (1. 5) 葵七四語 (1. 6) 賢木七〇語 (1. 4)
- 4) 花散里六語 (1. 2) 須磨五八語 (1. 3)
- 明石八六語 (2. 2) 澪標四四語 (1. 4) 総合三〇語 (1. 7)
- 松風三四語 (1. 6) 薄雲五三語 (1. 7) 朝顔三二語 (1. 5)
- 少女九三語 (1. 9) 梅枝四六語 (2. 4) 藤裏葉四一語 (1. 8)

第一部(玉鬘系)

- 帚木一五三語(3. 3) 空蟬二四語(2. 2) 夕顔九六語(2. 0) 末摘花七四語(2. 3) 蓬生六三語(2. 7) 関屋二〇語(4. 0) 玉鬘九六語(2. 3) 初音二六語(1. 7) 胡蝶三四語(1. 6) 螢四二語(2. 1) 常夏六四語(2. 9) 篝火七語(1. 8) 野分四四語(2. 4) 行幸七一語(2. 5) 藤袴二三語(1. 5) 真木柱七七語(2. 1)

第二部

- 若菜上一五七語(1. 6) 若菜下一七四語(1. 8) 柏木五六語(1. 4) 横笛三二語(1. 7) 鈴虫三二語(2. 3) 夕霧二七語(1. 9) 御法二三語(1. 2) 幻二四語(1. 1)

第三部

- 匂宮二七語(1. 9) 紅梅二〇語(1. 5) 竹河五六語(1. 4) 橋姫五八語(1. 6) 椎本六六語(1. 8) 総角一三九語(1. 6) 早蕨三五語(1. 9) 宿木一三三語(1. 5) 東屋一三七語(2. 2) 浮舟一〇五語(1. 5) 蜻蛉七九語(1. 4) 手習二八語(2. 0) 夢浮橋三〇語(1. 8)

ここで特筆できるのが、五四帖すべての巻に渡って巻固有語が出現していることである。それもすべての巻において、出現頻度は1.0以上、すなわち岩波の新体系本1頁当たりに換算して必ず一語以上の巻固有語が出現していることになる。さらに、これら固有語の

多くが源氏初出語であり、源氏作者がいかにも場面場面に応じた複合語を万遍なく造語したかが窺えるのである。中でも第一部玉鬘系における巻固有語の出現頻度の多さに気づかされる。特に帚木3. 3と関屋4. 0は突出し、常夏2. 9、蓬生2. 7など2. 0を超える頻度の巻が多く、玉鬘系の特色として取り組む必要があると思われるが、これは別稿に譲るとして、本稿で問題とするのは竹河巻の五六語と頻度1. 4という数値である。これは他の巻と比較して決して多い数とは言えないが、特に少ないわけでもなく平均した数値と言える。ちなみに匂宮巻二七語・頻度1. 9、紅梅巻二〇語・頻度1. 5においても平均した数値であり、匂宮三帖は作者の造語意欲という点では他の巻と同一線上にあるといっている。残念ながらというべきか、この観点から照らし合わせてみた限りでは、匂宮三帖が他の巻とは別筆であるという違和感は見出せなかった。

四、竹河巻における固有語の考察

竹河巻における巻固有語五六語をアイウエオ順で以下に掲出する。

- 急ぎ思(おぼ)す 抱き持つ 言ひおはさうず 言ひすさぶ
在(いま)すからふ うち出で過ぐ うちかづく うち交(か)ふ
うち止(さ)す 奪い取る うらみ嘆く うるさげなり
おはし合(あ)ふ 思(おぼ)し留(と)む 思(おも)ほし

定む 思(おも) ほしたゆたふ 搔(か) きありく 仮名がち
 なり 聞きわづらふ 聞こえうとむ 聞こえたすく 草深し
 癖(くせ) ぐせし 口はやし 屈(くん) じ入る 顕証(けん
 そう) なり 見証(けんぞ) す² 心静かなり 心せばげなり
 心寄せあり顔なり こぼれ落つ 御覧じなほす さはれや さ
 またげやうなり 賺(すか) せたつ 奏しおく 奏しなほす
 ただ人だつ 頼みかかる 散りかひ曇る つぼむ なま心ゆか
 ず なま心わろし 成(な) りあがる 馴れ交(まじ) らひあ
 りく 盗み取る のたまひ出だす はかばかしがる 踏み寄る
 仄(ほの) めき寄る 交(まじ) らひにくげなり 参(まゐ)
 りさまよふ 賞(め) でくつがへる 賞(め) でさわぐ 我(わ
 が) ぞ我ぞ 渡り通ひおはす

・ 初出語はゴシック表示にした。

・ 語彙の後に2とあるのは出現数が2例の意、その他はず

べて1例

・ 意味が分かるように漢字を当てた

この竹河巻における巻固有語のうち、初出語をゴシック表示に
 したが、五六語のうち6割以上の三六語が初出語であった。以降、巻
 固有語でかつ初出語を巻固有初出語と名付ける。竹河巻の作者は他
 の巻と同様に、耳慣れない言葉を巻内に取り込む傾向が窺われ、造
 語意欲も盛んであったことがまず分かるのである。さて以下に、竹

河巻の巻固有初出語を二章で分析した『源氏物語』の造語の特徴と
 照らし合わせてみる。

①「思ふ」、「聞く」、「言ふ」を語頭に使用した複合語が多出。

↓(竹河巻)「思(おぼ) し留(と) む」「思(おも) ほしたゆ
 たふ」「聞こえうとむ」「聞こえたすく」「言ひおはさうず」
 が出現し、語頭ではないが「急ぎ思(おぼ) す」の例も見られ
 る。

②「うち」、「もの」、「なま」を接頭語として生み出された複合語が
 多出。

↓(竹河巻)「うち出で過ぐ」「うち交(か) ふ」「うち止(さ)
 す」「なま心ゆかず」「なま心わろし」が出現。

③接尾語の付加による品詞の変換。

A 形容動詞への変換

「か」、「らか」、「やか」、「げ」、「がち」などの接尾語を名詞、形容
 詞、副詞などに付けて、形容動詞に変換された複合語が多出。

↓(竹河巻)「心せばげなり」「交(まじ) らひにくげなり」「仮
 名がちなり」「さまたげやうなり」が出現。

B 動詞への変換

「む」、「ぶ」、「だつ」、「やく」、「めく」、「がる」などの接尾語を名
 詞、形容詞、形容動詞などに付けて、「のようになる」、「のよ
 うにする」といった意味の複合語が多く造られている。

↓(竹河巻)「ただ人だつ」「はかばかしがる」が出現。

④ 疊語表現

↓(竹河巻)「我(わが)ぞ我ぞ」が出現。

④ 「顔なり」という表現

↓(竹河巻)「心寄せあり顔なり」が出現。

この「顔」という表現方法は源氏作者が好んで多用した特徴的表現であるが、この「心寄せあり顔なり」という巻固有初出語は複数の自立語が組み合わせられ、他の巻の巻固有初出語「厭(いと)ひ聞こえ顔なり」(朝顔巻)や「住み離れ顔なり」(手習巻)のように、いかにも紫式部の真骨頂とも言うべき造語と考えられる。

⑤ 漢語の導入

↓(竹河巻)「顕証(けんそう)なり」が出現。

「心寄せあり顔なり」のように三語以上の自立語を組み合わせた複合語は物語内において頻繁に用いられるが、源氏以前の主要な文学作品にはほとんど見られない特有の造語方法である。竹河巻においても「馴れ・交(まじ)らひ・歩(あり)く」「渡り・通ひ・御座(おは)す」といった巻固有初出語が出現している。

繰り返すが、全巻を通じてある巻にしか使用されない巻固有語

は、その多くが源氏以前の主要な文学作品には見出せない源氏

初出語であり、その大半が源氏作者における造語と考えられる。そして第二章で源氏初出語の特徴、言い換えれば源氏作者が造語を生み出す方法(あるいは癖)について分析したが、竹河巻における巻固有初出語の特徴はその方法(癖)と著しく重なっているのである。

このことは竹河巻に違和感を抱き、別筆の可能性を探っていた私にとってはまことに残念な結果になった。別筆の可能性を論じる方法として、巻全体の文章の調子(トーン・マナー)が他の巻と異なることを指摘したかった。そのためには「何となく稚拙である」とか、「何となくまずい」、では説得力がなく、文章を構成する一つ一つの語彙に着目し、どのような語彙を竹河巻に取り入れているのかを分析するべきであると考えた。当初いくつかの語彙を取り上げて、その用法の違いが他の巻と異なることにより考察しようとも考えたが、二、三例の語彙の用法が異なることで作者が異なると言うのはいささか早計だと考え直した。そもそも語彙には異なった用法が付きものであり、短い時間でもその経過とともに用法が変化しないと限らないからである。また一章で扱ったように、先行研究において登場人物の「官位の違い」を問題にして、「作者が違うから左大臣と右大臣が取り違えられている」旨の指摘も見られたが、むしろ別筆であればこそ、官位の問題には慎重になるであろうし、同筆であるが故のうっかりも生じるであろうし、物語の本筋に関わる取り違いでもない。

そこで竹河巻の全般に渡る文章の調子を作り上げる語彙に着目し

たわけであるが、結論として、巻固有語が他の巻に比べて著しく少なかったり、初出語が殆ど出現しなかったり、紫式部独自の造語方法による複合語の用例がなかったりすれば、著しい違和感を感じる事ができ、語彙が醸し出す文章の世界観とも言うべき違いを暴き出し、別筆の可能性を打ち上げることができたはずであった。が、残念ながら逆の結論を導き出すに至った。つまり、竹河巻の語彙から考察した限りでは、「竹河巻は同筆の可能性が極めて高い」と言わざるを得ないのである。

五 巻固有語と源氏以後の同時代他作品との照合

『源氏物語』の巻固有初出語は、その大半が全編を通して一回のみの出現であり、語彙として普遍性がなく、多くが作者の得意とする造語によるものと考えられるが、そのことを裏付ける一つの手立てとして、『紫式部日記』及び、源氏と源氏以後の同時代かな文学作品である『栄花物語』、『更級日記』、『浜松中納言物語』、『夜の寝覚』、『狭衣物語』との用例照合を試みた。

『源氏物語』の巻固有初出語のうち『紫式部日記』においても使用されている語彙は以下の二五語でありアイウエオ順に掲載する。

出であふ、誘(いざな) ひ出づ、言ひならぶ、うち解ける、
うちねぶ、愁へ泣く、おとしめ思ふ、多かりげなり、思(おぼ)

しならふ、思ひおくる、書きまず、聞こえさせおく、聳(そび)ゆ、たたきののしる、つきづきしげなり、造りいとなむ、造り下ろす、取りさく、なほりがたし、馴れ過ぐ、難ず、ほけ痴(し)る、見えなす、教(をし)へたつ、われさかしに

これら『紫式部日記』にも使用された二五語のうち、傍線を引いた僅か七語のみが『栄花物語』以下の五作品にも用例の見られるものである。「出であふ」が『栄花物語』に五例使用されている以外は、「誘(いざな) ひ出づ」が『浜松中納言物語』と『夜の寝覚』に各一例、「多かりげなり」が『狭衣物語』に一例、「思(おぼ)しならふ」が『狭衣物語』に一例、「聳(そび)ゆ」が『浜松中納言物語』に一例、『夜の寝覚』に二例、「なほりがたし」が『狭衣物語』に一例、「教(をし)へたつ」が『栄花物語』、『浜松中納言物語』、『夜の寝覚』に各一例使用されているに過ぎない。残りの一八語は『源氏物語』と『紫式部日記』以外には見られない語彙であり、いかにも紫式部の固有語といった印象が強い。なお、竹河巻における巻固有語「癖(くせ)ぐせし」も『紫式部日記』に用例があり、作者の共通性が窺われるが、この言葉は『蜻蛉日記』に一例の用例があり、紫式部の固有語とは言えない。

四章で掲げた竹河巻の巻固有語五六語のうち、巻固有初出語は三六語に及ぶが、この三六語が同時代五作品に用例があるかを調べたが、用例があるのは以下の六語(七例)のみであった。「急ぎ思(お

「す」が『栄花物語』に一例、「言ひおはさうず」が『狭衣物語』に一例、「屈（くん）じ入る」が『夜の寝覚』に一例、「顕証（けんそう）なり」が『更級日記』と『浜松中納言物語』に一例ずつ、「頼みかかる」が『狭衣物語』に一例「仄（ほの）めき寄る」が『夜の寝覚』に一例見られるに過ぎない。残りの三〇語は竹河巻を書いた作者が独自に造り出したものと考えるのが妥当ではないか。であるならば、この時代に果たして紫式部以外にそのような特異な造語能力を有した物書きが存在したのだろうか。竹河巻以外の他の五三巻と極めて重なった方法で複合語を生み出し得る逸材が彼女以外に存在したとは考えにくいのである。

（おわりに）

さて、では竹河巻の作者が紫式部であるならば、なぜこの巻に多くの研究者が違和感を抱くのであろうか。先行研究によっていろいろな問題点が論じられてきたが、冒頭で述べたように、薫の人物像は物語の本質に関わる問題であり、それが、竹河巻と橋姫巻以降では一八〇度異なつて描かれていることはなかなか説明がつかない。もし説明をつけようとすれば、大朝雄二（注16）の論じるように、「作者は紫式部であるが、推敲する以前の未定稿とかんがえるべき」という結論に至るのが妥当なのかもしれない。紫式部は幻巻までを書き上げて、光源氏の死とともに『源氏物語』を終わりにしたかっ

たのではないか。少なくとも書きたいことは全部書いてしまい、続編など思いもよらなかったのではないか。ところが周囲からの続編の要望が強く、気の進まないまま書き出したのが匂宮三帖かもしれない。この時点では続編のしつかりしたテーマが決まっていなかった、三帖ともそういう書きぶりである。匂宮巻は光源氏死後の光源氏に直結する匂宮と薫の動静が語られ、紅梅巻は内大臣死後の内大臣家の人物が語られる。また竹河巻は、鬚黒亡きあとの母玉鬢の後日談が展開する。しかしながら、三帖を読み進んでみても、物語のテーマが見えてこないのである。作者は試行錯誤をしながら書き続けるうちに、何かテーマを見つげようと模索しているかのようである。そのような状況において竹河巻は書かれたが、宇治十帖という続編のテーマを見出した後は、ストーリー展開には何ら繋がりを持たない巻となり、竹河巻は推敲して世に出す必要のない未定稿という位置付けにしておいたとは考えられないだろうか。それが何らかの理由で世間に露出されたと推定するのは、あまりにも非現実的であろうか。

以上

【付記】 本稿は平成二十七年学術院大学人文科学研究者研究助成の給付を受けた研究成果の一部である。

注

（1） 武田宗俊「竹河の巻」に就いて『国語と国文学』（一九四九年八

- 月号)
- (2) 池田亀鑑『新講源氏物語・下巻』至文堂(一九五一年五月)
- (3) 小山敦子「女」宮物語と浮舟物語』『国語と国文学』(一九五九年五月)
- (4) 石川徹「源氏物語は果して紫式部一人の創作か」『解釈と鑑賞』(一九六一年十月号)
- (5) 石田穰二「句宮・紅梅・竹河の三帖をめぐる」『解釈と鑑賞』(一九六一年十月号)
- (6) 石田穰二「紅梅の巻語彙考証」『学苑』(一九六二年一月号)
- (7) 石田穰二「句兵部卿の巻語彙考証」『国語と国文学』(一九六二年五月号)
- (8) 石田穰二「句宮・紅梅その後」『王朝文学』(一九六二年十月号)
- (9) 石田穰二「句宮・紅梅・竹河」『解釈と鑑賞』(一九六三年三月号)
- (10) 石田穰二「句宮・紅梅の語彙」『学苑』(一九六五年一月号)
- (11) 高橋和夫「源氏物語の主題と構想」桜楓社(一九六六年二月)
- (12) 稲賀敬二「源氏物語の研究」笠間書院(一九六七年九月)
- (13) 野口元大「物語の統編」『論叢王朝文学』笠間書院(一九七八年十二月)
- (14) 今井源衛「竹河巻は紫式部原作であろう(上)」『文学研究』(九州大学文学部) (一九七五年三月)
- (15) 今井源衛「竹河巻は紫式部原作であろう(下)」『語文研究』(九州大学国語国文学会) (一九七五年六月)
- (16) 大朝雄二「源氏物語句宮三帖試論」『日本文学新見』笠間書院(一九七六年)
- (17) 池田和臣「竹河巻と橋姫物語試論」『源氏物語及び以後の物語研究』と資料・古代文学論叢第七輯』武威野書院(一九七九年)
- (18) 池田和臣「句宮・紅梅・竹河三帖の成立」『講座源氏物語の世界第七集』有斐閣(一九八二年)
- (19) 田坂憲二「竹河巻紫式部自作説疑有」『源氏物語の展望 第二輯』三弥井書店(二〇〇七年)
- (20) 大野晋「基本語彙に関する二三の研究」『国語学 第二十四集』(国語学会編 一九五六年)
- (21) 一語の定義は宮島達夫『古典対照語い表』(笠間書院 一九九二年)に従った。
- (22) 山口仲美『平安朝の言葉と文体』(風間書房 一九九八年)
- (23) 一語の定義は池田亀鑑『源氏物語大成』に従った。

ENGLISH SUMMARY
Who wrote “Takekawa” in The Tale of Genji
—Examining special words in “Takekawa”—
YOSHIMURA Ken-ichi

Many researchers of The Tale of Genji have long suspected the writer of “Takekawa” could not be Murasaki Shikibu, because the writing style in “Takekawa” is poor and childish, and the story of “Takekawa” is not possible.

Recently, students of Genji have chosen not to take up this question because of the difficulties involved, but, in this paper, I attempt to answer this question by examining special words, namely, those words that were not found in The Tale of Genji. Murasaki Shikibu created many new words in The Tale of Genji. In this paper, I find all of the special words in Genji and compare them with the special words of “Takekawa”. In doing so, I am convinced that this is an innovative way of dealing with the problem of identifying the author of the latter.

Key Words: “Takekawa”, special words, The Tale of Genji, Murasaki Shikibu